

【「復興とは」報告フォーマット】

1. あるべき「復興」とは何か、あなたはどのように考えますか。
<ul style="list-style-type: none"> ・復興とは、被災者の「まるごとの人生」、および、被災地の「まるごとの社会」を再生成しつづける営み。だから、防災人の「人間知らず」、「社会音痴」は禁物。（自己反省） ・「復興」は、多様な当事者が「ともになす」こと。研究者（学会）も、「ともになす」べき当事者の一人。その時、研究者「なのに」できること、研究者「だから」できること、この両方を大切に。
2. あなたの復興観におけるキーワード（最大 10 個前後）
<p>「多様性」「生きられる時間」「アクションリサーチ（共同実践研究）」「世直しと立て直し」「重建・恢复と復興・復旧」「語り直す・語り継ぐ・語り結ぶ（restory-relay-relate）」「再生成（regenerate）」「応答と責任（responding-responsibility）」「re-（折り返し）」「バイプレーヤー」「風化と熟成」「アイデンティティ」「民族・文化・伝統」</p>
3. あなたがそのような復興観を持つに至った背景について
<ul style="list-style-type: none"> ・「多様性」。復興を語る言葉のレパートリーをもう少し増やす。復興をより多様に、より豊かに構想し、支援し、共演するために。 ・阪神・淡路大震災の被災者語り部グループにおける 10 年間の活動。A さんが、震災「9 年目」に絵本を出版した理由がわからなかった自分の不徳。「震災を年表の 1 行にしたい」（H さん）。「生きられる時間」。横軸は、同じなのか？ ・「世直しと立て直し」。未来に対する透徹した思考を欠いた復興論はありや？ 過去と未来の断絶としての自然災害。だからこそ、どんな未来か何かが大切になる。とんでもないことが起こるかも知れない未来（世直し）と、これまでのつつがない延長としての未来（立て直し）。 ・「重建・恢复と復興・復旧」。四川大地震が教えてくれたこと。自分（たちの社会）が「何でないか」を知るために。（何をしに海外の復興支援に行くのか。もちろん、支援しに、だが。） ・GDP が 10 年で倍増する社会で起きた地震からの復興と、10 年間 GDP が安定（停滞）していた社会で起きた地震からの復興。同じであるはずがない。四川大地震は、東名高速、新幹線が開通し、首都・東京で五輪を間近に控えた日本に起きた阪神・淡路大震災なのかもしれない。 ・「語り直す・語り継ぐ・語り結ぶ（restory-relay-relate）」、「再生成（regenerate）」。「復興は箱モノだけではない、制度だけでもない。心だ、社会だ、活気だ、思いだ、再生と希望の物語だ」。賛同。しかし、もう少し精緻化したい。 ・キーワードは「re-」。「re-」とは「折り返し」。「折り返し」は、行って帰って「つながり」になる。たとえば、過去や未来の自分からの折り返しは「語り直し」。未来の被災者からの折り返しは「語り継ぎ」。被災者地間交流という折り返しは「語り結び」。 ・これらの折り返しが多数反響・共鳴しあって、被災者の人生、被災地の社会は、総体（まるごと）として再生成（regenerate）される。 ・「復興物語（物語復興）」は、単一の物語、単独の話者では機能せず。多様な形で「物語」に対する折り返しを求める被災者（被災地）の呼びかけに対する「応答」を必要とする。共に

「物語」を生きるバイプレイヤーを必要とする。バイプレイヤーとしての研究者。

- ・復興の当事者の一員としての研究者は、このような呼びかけに対して、いかに「応答」し、また「責任」を果たすべきか。「アクションリサーチ」のために。
- ・「風化と熟成」。阪神・淡路大震災後の 15 年を間近に見て。失ったものと獲得したもの。イベント「生き方で伝える、生き方で応える」。「なぜいなくなっちゃう？ 理解できへんかった」はずの父の背中を追いかけて消防士になった I さん。「あのときが一番楽しかった」学校を作ってくれた担任の先生と同じ教師の道を選んだ H さん。60 歳から 75 歳への 15 年間、30 歳から 45 歳への 15 年間、そして、10 歳から 25 歳への 15 年間。同じであるはずがない。
- ・「語り直すこと」は、「アイデンティティ」を作る（作り直す）こと。消防士としての I さんのアイデンティティ、先生としての H さんのアイデンティティ。娘を亡くした A さんのアイデンティティ。（災害後を）生きること＝アイデンティティを作り直しつづけること。
- ・アイデンティティの作り直しが社会規模に拡大すれば、それこそが、民族、伝統、文化への目覚め。アエタの文化がピナツボ噴火で危機に瀕したのではない、ピナツボ噴火がアエタの文化を意識せしめた（「噴火のこだま」：こだま、まさに re-だ）。チャン族の伝統が四川地震で危機に瀕しているのではない、四川地震がチャン族の固有性を自他に意識させた（Y さん）。

4. 上記を理解する上で参考となる文献

【議論全般について】

- ・「防災人間科学」（矢守克也著：東京大学出版会，2009 年 9 月刊行）

【立て直しと世直しについて】

- ・「災害復興における『立て直し』志向と『世直し』志向」（矢守克也著：日本災害復興学会 2008 年度学会大会予稿集，47-52，2008 年）
- ・「時間と自己」（木村敏著：中公新書，1982 年）
- ・「分裂病と人類」（中井久夫著：東京大学出版会，1982 年）
- ・「復興計画」（越澤 明著：中公新書，2005 年）

【語り部グループ関係について】

- ・「阪神・淡路大震災を記憶した〈場所〉」（矢守克也著：南・サトウ（編）講座：質的心理学 3、東京大学出版会 p.77-102，2008 年）
- ・「語り部活動における語り手と聞き手との対話的關係 — 震災語り部グループにおけるアクションリサーチ」（矢守克也・船木伸江著：質的心理学研究，7，60-77，2008 年）
- ・「4 人の被災者が語る現在 — 語り部活動の現場から」（矢守克也著：質的心理学研究，2，29-55，2003 年）

【「生きられる時間」について】

- ・「時間の比較社会学」（真木悠介著：岩波書店，2003 年）、上掲木村（1982）も

【アクションリサーチについて】

- ・「アクションリサーチ」（矢守克也著：やまだ（編）質的心理学の方法 新曜社，p. 178-189，2007 年）

【アイデンティティについて】

- ・「噴火のこだま」（清水展著：九州大学出版会，2003 年）

別紙

所属 京都大学防災研究所
氏名 矢守克也